

デイヴィッド・ホックニーの《劇中劇》（一九六三年）  
——一九六〇年代に描かれたカーテンの連作の文脈から——

田中麻帆（早稲田大学）

イギリス出身の画家デイヴィッド・ホックニー（一九三七年-）は王立美術学校を卒業した翌年の一九六三年、油彩画《劇中劇》を制作した。この絵には彼が当時頻繁に描いていたカーテン（あるいは舞台幕）が見られる。カーテンをモチーフとする絵画群は一九六一年に始まり、アメリカへの移住という転機を迎える一九六四年にかけて制作された。

《劇中劇》は一九六三年の初個展において中心作品とされたことから、画家にとって重要なものであったと考えられる。本作には、カーテンの前に立って大きく両手を挙げる男が描かれ、カンヴァスの手前には一部実物のガラスが取り付けられている。このためまるで男が絵画とガラスの間に閉じ込められているように見える。

画家自身は、これを一点透視図法の絵画空間に対する批判として回顧している。また、ホックニー研究の第一人者であるリヴィングストンは、本作をホックニーの画商ジョン・カスミンが絵画空間に閉じ込められている光景と解釈した。続く先行研究も以上の見解を踏襲し、《劇中劇》に関する解釈はいずれも部分的なものに止まる。

本発表は一連のカーテンの作品を視野に入れ、《劇中劇》のモチーフおよび形式を制作背景と併せて再検討し、新たな解釈を提示するものである。具体的にはまず、連作に描かれたカーテンのモチーフが持つ「隠す/暴く」機能を、絵画空間の構成や演劇的要素との関係から分析する。一方この連作は、形式の面では同時代の抽象画をナラティブな表現へと転用し、揶揄しているとの指摘があるものの、具体的な分析はこれまで成されてこなかった。このため発表者は改めて連作の形式を同時代の美術批評および作品と比較する。更に制作の背景として、イギリスの政治体制および美術界に関する画家の言説を検証し、上記のモチーフ分析・形式分析との照合を行う。こうして、連作のカーテンが絵画空間の遠近法的イリュージョンを解体し、同時に意味の上では、政治体制や美術界の主流における隠された支配的システムを暴く作用を持っていたことを明らかにする。

ホックニーは同性愛者でありイギリスの若手画家であったため、マイノリティとしての立場と上記の表現は連関すると言える。しかし本発表では、着想源とされるイタリア17世紀のドメニキーノの作品に関する再考を手掛りに、《劇中劇》における視線の能動性・受動性の共存を指摘し、本作がマイノリティとしての被害表明のみに終わらない点を示す。

以上の考察を踏まえ本発表の最終目標は、従来「画商の肖像」として捉えられてきた《劇中劇》を、ホックニーの同時代への問題意識が集約され、そのアイデンティティを反映した一種の自画像として読み直すことにある。一九七〇年代以降も彼の画業に頻出するカーテンのモチーフについて、その問題の端緒を画家と社会との相互関係の中で見直す本発表を通して、ホックニーの芸術全体を考える上でも重要となる核心を提示したい。